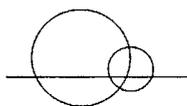


〔学習法で学んだこと〕



私が見た東亜同文書院

経済学部1年 服部吉紀

わたしは「創設者たち」、「大旅行」、「愛知大学」、「幻の名門校」、「東亜同文書院設立要領」の5つのキーワードから東亜同文書院について皆さんに説明したいと思います。

はじめに

東亜同文書院とは、1901年に中国上海で設立された、日中連携のための人材育成を目的とする高等教育機関であり、1945年の日本敗戦により閉学するまでに5000人も卒業生を出しています。



上海に東亜同文書院が存在していた時期の中で一番充実した

また、東亜同文書院は現在では、「幻の名門校」とも呼ばれています。それは歴史に深く関係しており第二次大戦時、きっかけは英国からの現地調査の委託で書院の学生が中国の国土を調べていたということがありました。また、東亜同文書院の最大の財産ともいえる調査報告書は4部複写式で、現在、愛知大学と中国が所有している事が判明していますが、一部は、すなわち軍部にも渡っていたという事実になってしまい、書院はスパイ学校と呼ばれ、名門校だった書院に「幻」という

言葉がついてしまったのです。

創設者たち

近衛 篤磨：東亜会と同文会が合併して生まれた東亜同文会の初代会長で、アジア主義的色彩の強い立場に立脚し、中国・朝鮮の保護と日本の權益保護のため、外務省と密接に提携しながら、1900年に南京同文書院（後の東亜同文書院、その後身愛知大学）を設立するなど対中政治・文化活動の推進を図っていった人物

荒尾 精：上海に日清貿易研究所を設立し民間人の立場から大陸研究を主導。

日清貿易研究所は彼の死後設立された東亜同文書院の前身となる。

根津 一：軍人として日清戦争に従軍する一方、上海日清貿易研究所の運営にあたり、また上海の東亜同文書院の初代、3代院長として日中間で活躍する人材育成と人格形成に努めた。また、彼が言った「建学の精神」は、根津精神や書院精神といわれ、後の書院生に大きな影響力を与えた。



荒尾 精



近衛 篤磨



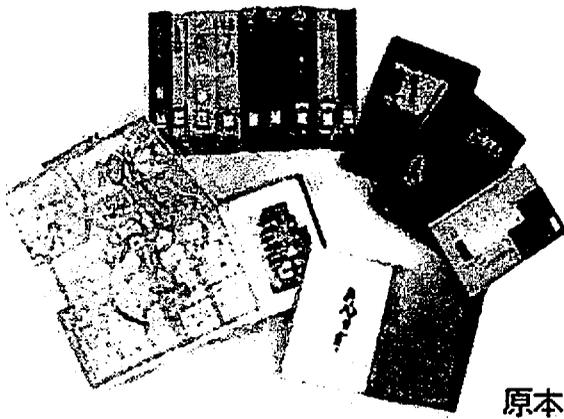
根津 一

この三人は東亜同文書院を語る上で外すことのできない人物です！



大旅行

東亜同文書院を語る上で外すことが出来ないものは大旅行だと思います。大旅行とは、書院生たちが自分たちで中国の行きたい場所を選び、計画し、その地域を調査したり見たりします。今でいう修学旅行のようなものでした。しかし、修学旅行と違うことはおそらくその月日だと私は思います。現在の修学旅行では、せいぜい二泊三日くらいが一般的でしょう。しかし、書院では3か月から6か月かけて中国を旅します。また、閉学になるまでに、書院の大旅行はほぼ中国全土にも及び、ロシアや中東のあたりにまで足を伸ばしています。それを記録した大旅行誌は現在でも中国研究のトップクラスの研究資料となっています。



大旅行誌の原本

東亜同文書院大旅行誌5「孤帆雙蹄」より一部抜粋

自分たちが郷を出た時に、萬斛に綺愁胸にある。武漢市10月になって秋も老けてきて、叛く気はないが、動く男心。我が先祖の軒轅が世を去って、星霜に移る四千年、美しい河や山400の洲、今、東胡のまえにおののいている。崑崙の峰、千年の雪に永遠の光がある。洞庭湖の水、萬重の波色昔に變らないけど、ああ河や山、今は我らのものではない。韃虜関に入って三百年。大きい虐待の日々を受け、漢聲四野にかすかにある。鳴き声、革命の悲歌、われ、これを聞くのに堪えることができ

なくて、願わくば自身を愛せよ。

このように、大旅行にはさまざまなことが書かれています。

現在の愛知大学

日本の敗戦後、東亜同文書院も閉学になったが、書院の教員や学生は書院の復活を望んでいた。しかし、GHQにより、東亜同文書院の復活は認められなかった。そのため、東亜同文書院最後の学長であった本間喜一は自らの資材を投げうって、愛知大学を設立しました。しかし、愛知大学はGHQからのがれるために、東亜同文書院とはまったく関係のない学校としてはじまることにならざるをえませんでした。しかし、現在の愛知大学は、書院の精神を受け継いでいます。たとえば、中国研究科の大学院であり、孔子学院や現代中国学部などがいえます。



本間喜一

また、愛知大学の中にある東亜同文書院記念センターでは根津一が書いたという、東亜同文書院設立要領というものがあります。(まだセンターに行っていないので・・・実物はみていませんが)これは大きく「興学要旨」と「立教綱領」の2つからなり、東亜同文書院の精神ともいっていい重要文献です。

感想

私はこの春の授業の学習法を通して、東亜同文書院について調べていくうちに、最初は愛知大学自体滑り止めできたので、愛知大学歴史すらしらなかつたけれど、入学式のときのビデオで愛知大学は昔、東亜同文書院という学校であったことをして、とても伝統ある学校だと思いましたし、

藤田先生が書いた最初の本を読んだときに、東亜同文書院の創設者や学生には、そうそうたる人物たちが名をつられており、また現在の世界史、特に中国関係の大きな事件は必ずといっていいほど東亜同文書院の学生たちがかかわっていることをして、とてもおどろきでした。

ほかにも一度授業を中断して、東亜同文書院設立要領の読み下しを聞いた講義でまだ私たちは記念センターにいてないので実物の東亜同文書院設立要領を見たわけではないけど、日清戦争などがあって中国への反発が強いなか、根津一はここまで中国のことを思っていたことをして、その時代背景を考えると根津一に対して反発などがあつたかもしれないのに中国の平和と経済の活性

化に取り組んでおり、とてもすばらしいとおもいました。

また、「幻の名門校」東亜同文書院の軌跡を見て、入学式に見たビデオとは違う観点で東亜同文書院について放映されていて、いままで勉強したことあつて、自分なりに東亜同文書院が見えかけていたところでこのビデオを見たことで、今までの自分の考えとは違う、新たな方向からも東亜同文書院を見ることができて、私自身東亜同文書院をまた別の方向から見られるようになりました。

最後に、この学習で東亜同文書院（愛知大学）に興味を持つことができました。もし、またこういう機会があれば、東亜同文書院について、考えていきたいです。